

善養寺便り

第二号(平成二十六年八月号)

発行 善養寺

◆善養寺墓苑万灯会法要・盆会法要

天候不順だった八月がもうすぐ終わります。もはや日本の気候は熱帯化し、異常気象が異常ではなくなりつつあります。広島はじめ大雨ごとに各地に被害が出る自然の猛威に私たちがついていけない気がしています。

さて善養寺では、八月は恒例の善養寺墓苑万灯会法要と、盆会法要を行いました。どちらも暑い中多くの方がお参りくださいました。

万灯会法要は今年で三回目になりますが、今年は法要の参拝者を少しでも増やそうと十三日に設定しました。当日は幸い雨も降らず、初めて参加された方も少なからずいらっしゃいました。六時からお名号碑前で阿弥陀経をお勤めし、皆さんのお焼香時に行灯を渡し、各自のお墓に灯していた。六時後、善養寺住職、前住職と大学生の長男とともにすべてのお墓の間を讃仏偈をお勤めしながら行道をしました。ただ、万灯会らしく行灯が暗くなった墓地全体に浮かび上がるころには、皆さんもうお帰りでした。(これは想定内でしたが。)



この万灯会法要が単なるお盆の年中行事のお墓参りとしてでなく、多くの有縁の方々と共に勤めをし、お念仏を唱え、仏縁がさらに深まります機縁になることを念じております。この法要は、春の彼岸会法要とともに今後も続けていきますので、善養寺墓苑にご縁ある方は是非お参りください。なお、盆会は善養寺本堂でお勤めをします。納骨堂の有無に関わらず、お盆にもお寺にお参りしてください。

南無阿弥陀仏をとまふれば

観音勢至はもろともに

恒沙塵数の菩薩と

かげのごとくに身にそへり

視覚聖人「現世利益和讃」より



◆九月以降の行事

九月九日(火) 午後一時半より

「第三回 善養寺仏教婦人会仏教講演会」

ご講師 谷川弘顕先生

十一月一日(土) 二日(日)

「報恩講」

ご講師 鹿多証道先生(加古川組)

十二月上旬

「第四回 善養寺仏教婦人会仏教講演会」

ご講師 谷川弘顕先生

九月と十二月の仏教婦人会仏教講演会は、お馴染みの谷川先生による「正信念仏偈」のお話です。あと二回で「正信念仏偈」の話は終了します。少し難しい部分もあるでしょうが、いつも楽しく分かりやすくお話しさせていただきます。是非お聴聞ください。お聴聞はいわゆる勉強ではありませんが、今日はこの紙面で少しばかり「正信念仏偈」のおさらいと次回の講演会に向けての基礎講座を述べましょう。

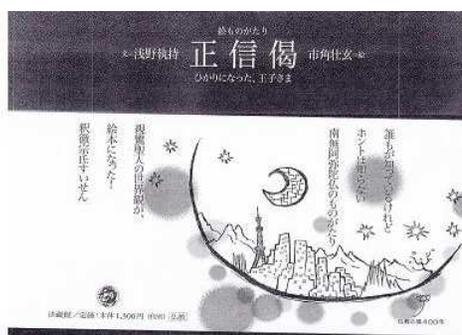
◆講演会のための「正信偈」入門1

「正信偈」は正確には「正信念仏偈」と言います。いわゆる三部経がインドから伝わったお経であるのに対し、「正信偈」は親鸞聖人自身がお著しなさった「教行信証」という書物の中に載っている六十行百二十句のお経です。一四〇〇年代後半（室町時代）に蓮如上人が和讃とともに朝夕の勤行で用いるようになって、一般に広く読まれるようになりました。

冒頭の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」は日本語式に読むと「無量寿如来に帰命し 不可思議光に南無したてまつる」となり、「帰命」も「南無」も実は同じ意味で、「無量寿如来（いつでも）」と不可思議光（どこでも）にすべてをおまかせします」という意味です。この冒頭二句が、親鸞聖人自身の信仰宣言であり、正信偈全体の意味を凝縮してののです。

前回までの谷川先生のお話で、すでに百句ほどのお話が終わっています。ええっもうそんなに終わったのか？、とお思になる方もいらっしゃるかもしれませんが、正信偈は浄土真宗のエッセンスが詰まったお経です。どこから聴いても、どこから読んでも、浄土真宗のみ教えにふれることになるのです。

さて、前回のお話の中から一句取り出します。九九句目に「興韋提等獲三忍」という句があります。日本式に読むと「興^え与^と等しく三忍を獲」となり、その中の「韋提」というのは実は人の名前前で、「韋提」とは釈尊の説法を聞いて信心を得た「韋提希夫人」という人で、観経に出てくる人物です。そして「獲三忍」とは要は「信心を獲得する」の意なので、「韋提希夫人と同じように信心を獲得する」という意味になります。韋提希夫人は罪深い凡人の代表として出てくる人物です。実は正信偈には人の名前がたくさん出てきます。今回の先生の話は「源信広開一代経」ぐらいから始まると思いますが、「源信」も人名で「往生要集」という書物を著した人物として、日本史の教科書にも出てきます。



↑正信偈の絵本もあります

以上、まことに乱暴な説明でしたが、とりあえず「正信偈」の一字一句

すべてに深い意味があるのは間違いありません。続きは次号です。

◆平成二十六年年度護持会会費、仏教婦人会会費ご納入のお願い
すでに多くの方に納入いただきありがとうございます。もしお忘れでしたらご納入よろしくお願ひします。

◆仏婦コーラス大募集中

毎月第三金曜日午前十時より、本堂で練習しています。

現在、報恩講での披露に向けて、沖縄の歌を練習中。

「花」と「童神（わらべがみ）」です。是非一緒に！

◆過去帳に見るヒストリー・オブ・善養寺

以前から要望もあり、また企画もしてありました善養寺の歴史を今後随時掲載していきます。ただ、左記にあるとおり、善養寺はたびたび火災や大水に見舞われており、明治四十五年にも本堂庫裏が全焼しています。したがって、古文書の多くは散逸、消失しており、当山の歴史も現存する過去帳が唯一の手がかりになります。乏しい資料ですが、その過去帳からでも先人の並々ならぬ辛苦がうかがえます。では、当山の歴史をひもといてみましょう。
最初の記録は

開基 国林院 釈円慶法師

創建 寺号 寛文二年十一月十三日御免

木佛尊像 延寶元年十一月五日御免

とあります。御免とは、本願寺より寺号を賜ったということでしょう。ですから、当善養寺はこの寛文二年（西暦一六六一年）に創建されたこととなります。また、坊守が姫路生野町江尻傳右衛門娘マチとなっており、これ以後江尻姓を名乗ったものと思われれます。

開基の円慶法師がどのような経緯で、この八代の地に寺院を建立したかは不明ですが、もと他宗であったのを浄土真宗に転宗したという話です。なお、一六六一年とは、徳川幕府開幕が一六〇三年、家康の死去から五〇年ほど経った四代將軍家綱の時代で、江戸時代では初期にあたります。江戸時代の諸文化が花開く直前の時代です。そして、開基円慶法師は一六七五（延宝三）年寂、坊守様は一六八一年（天和元年）寂となっています。（続きは次号）

